

特集：育て！天文学者の卵たち - 研究機関が行う体験事業

銀河学校卒業生から 研究者への一步 ～ 銀河学校を振り返る ～

1. 天文学への考えを改める

高校1年の冬、母が朝日新聞に載っていたとある記事を見つけました。東京大学の木曾観測所で「銀河学校」というものが行われるらしい、なにやらでかい望遠鏡で高校生が観測をするらしい。こんなチャンスはめったにないぞ、と、いちかばちか応募してみることにしました。応募総数336名、その中で銀河学校に参加できたのは30名。合格の通知をもらったときは本当にびっくりしました。

漠然と天文がやりたい、と思っていた私にとって、銀河学校は決定的な転機となりました。それまでの天文に対する考え方をまったく変えてしまうようなものだったのです。

巨大な105cmシュミットカメラ、そして、目で望遠鏡をのぞくのではない、パソコンの前に座って見る星。研究としての「天文学」に対する驚きを覚えています。

「以前から天文学者になりたいと思っていましたか？」「銀河学校を体験した後で、天文学者になりたいと思っていますか？」

銀河学校の最終日に行われたアンケートです。前者の質問に対して、30人中11人が手を挙げ、後者にも11人がYESと答えています。しかし顔ぶれは違っていました。

想像していたものと違うと考えを改めた人。逆に、銀河学校で観測、研究の面白さを知り、新たに天文学を志望しようと

思った人。はっきりとわかれたことになりました。

高校生が思い描く「天文学」と、実際の「天文学」との間には、多くの場合、大きなギャップが存在します。参加者のほとんどが、このようなギャップを感じたことでしょう。それを知った上で天文学を志望する、ということは、大変意味のあることだと思います。現に大学に入ってからそのようなギャップを知り、自分のやりたいものと違う、と思ってしまう人も少なくはないのです。

2. 大学生になった今、 銀河学校を振り返る

しかし、この時の驚きと経験は、大学進学の際に大きく役に立ちました。

現状がわかっていたので、目標がとても明確になりました。天文を専攻するためにはどんなことを勉強しなければいけないのか。それを身につけるには何をすべきか。そして、何より、天文をやっていこう、という覚悟ができました。

大学生になり、天文学教室にいる今、銀河学校を振り返ってみると、高校生の頃と比べて大分見方が変わりました。まず、シュミットを高校生に使わせるということ。学部生でもなかなか使わせてもらえない木曾のシュミット。観測時間を高校生のため

に割く，ということがどれだけ大変なことなのか，ということを考えてみると，木曾側の銀河学校開催時の決断が，どれだけ思い切ったものであったかがわかるようになりました。自分のした体験というのが高校生にとってどれだけ貴重なのか，ということにも気づかされました。

2泊3日の銀河学校は，決して易しいものではありません。講義のレベルも高く，体力的にもかなりハードなものでした。しかし上で述べた後者の質問で手を上げた11人は，そのような現場を知った上で天文学を志望したわけです。これこそが，銀河学校の成果であり，意義なのです。

高校での教育と，大学での研究というものには大きな差があります。今，そのギャップを埋めようとする教育が大学でも行われています。しかし，実際には追いついていないのが現状だと思います。

勉強と研究の違いを銀河学校で学びました。いわば，銀河学校は，研究者養成の第一歩ともなるのです。大学に進学する前に，自分でおもしろいサイエンスを探し，考えながら解き明かして行く「研究」というものに触れることには，今求められている理科教育のあり方があるのかもしれませんが。「銀河学校」，「君が天文学者になるN日間」といった機会が果たす役割というのは，まさにそこにあると思います。

3. 銀河学校卒業生の現在

実際，銀河学校卒業生は，天文，物理，地球惑星科学などの分野に進学する割合が高いです。高校生であるOBの中でも，上に



2002年夏・銀河学校同窓会 於木曾観測所

あげた分野に進みたい，という人は多いようです。銀河学校の先輩が在籍する大学へ進学しようとするものも多く，その大学への道を切り開いた先輩から大学の情報を教えてもらっています。卒業生の中から大学院合格者もではじめました。

また，卒業生は独自に同窓会を組織しました。メーリングリストなどを設けて，全国の仲間と連絡を取り合ったり，情報交換をしています。銀河学校で得た思いがけないものといったら，同じ目標を持つ仲間たちでしょう。銀河学校では，観測の経験からだけでなく，その参加者からも大いに影響を受けました。

そして，銀河学校自体も，今，転機を迎えようとしています。大学に進学し天文学者の卵となったOBたちによって銀河学校が開かれようとしているのです。今度は私たちが小さな天文学者を生み出していく時代がやってきたのです。

(福士比奈子)